

ますか」と言うので、通訳とも相談して「自分達でしか出来ないことはやろう」と12時を回った深夜にニーナさんのお宅を訪問したのが最初の出会いでした。

Q4. そうでしたか、それではニーナさんのこれまでの人生についてどうぞ。

A4. 私が把握しているのは、ニーナさんは満州の牡丹江で終戦の8月17日に、両親と一緒に関東軍のトーチカの中に避難している時に、ロシア軍の攻撃に合っただけで残念ながら両親は亡くなったのですが、ニーナさんはその両親の屍の下で泣いていた。そのところをロシアの兵隊に発見され救い出されてエカテリンブルグまで連れてこられたのです。発見された時に屍の傍らにニーナさんの1歳の時の誕生祝いの写真と家族の写真があったらしいのですが、その後受け取った将校の鞆の中に家族の写真が入らなかったで、ニーナさんの誕生祝いの写真だけを持ち帰ってエカテリンブルグの孤児院に預けたと言うように聞いています。

Q5. で、そういう悲しくも厳しい人生を背負ったニーナさんを見つけて、ニーナさんにとって初めて会う外国人にして日本人の貴方に、たった一枚しかない大切な誕生祝いの写真など貴重な資料を託されて、帰国してからどんな活動をしたの。

A5. 「まず、重大な任務を負ったと思いました」。それまで私は、いわゆる仏様を探し歩いているという思いでした。それがニーナさんを見つけて「生仏さんに出会った、生きた仏様が出て来た」というように感じた訳です。

ニーナさんに最初に会った時は、非常に緊張した面持ちでした。彼女からは、自分が幼児の時の写真、大学生時代の写真、それから牡丹江で救い出され敵国の日本人としては危険なので中国人としてエカテリンブルグの孤児院に預け、そこで育てられたこと等、それまでのいきさつを書いたロシアの将校の手紙のコピーを預かったのです。

そして帰国後、私の家の隣に住む読売新聞社の次長さんに相談してみたところ、8月15日の終戦記念特集で掲載してくれる事になり、日本で初めて新聞で報道して頂きました。

それで、私はニーナさんから託された資料とこの新聞記事を合わせて厚生労働省に方にお送りしましたら、担当の方が「今後は自分達が責任を以て探すから」と引き受けてくれました。それ以後は、私は年に1回のクリスマスカードや日本風のカレンダーをお送りする程度のお付き合いをしてきました。

Q6. それでは最後に、昨年12月1日に大阪のホテルで、ニーナさんと2年振りに再会しての印象と、これからの支援計画について一言どうぞ。